広島県尾道市三成地区の方言記述

――地域の文献資料に残る方言談話から捉える――

藤本　真理子

一　はじめに

本稿では、「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌に掲載された「三成の昔の話を聞く」に見られた方言のうち、前稿（二〇二二）「地域の会報にあらわれる方言談話――『三訪会会報』広島県尾道市三成地区を中心に――」の報告後に明らかになった点を中心に示す。この考察は、前稿（二〇二二）と「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌に掲載された「〈方言シリーズ〉みなり弁ばあ」の資料紹介を行った前々稿（二〇二一）「地域のことばはどのようにして残るか――『三訪会会報』を資料のひとつに――」を受けてのものである。前稿・前々稿では、地域住民によって記録された資料に残される方言記録および方言談話から、当該地域の方言文法がどのように資料に残されていくか、また方言意識がどのようにうかがえるかについて捉えてきた。

本稿は、前稿で課題として残していた「静かだ」や「にぎやかだ」のような形容動詞について、近隣地域を対象に報告されている方言記述を元に紹介し、また「テ」や「チャッタ」を用いる敬語についても、活用を中心にどのようにそれらを使用しているかを明らかにすることを目的とする。記述を進めるにあたり、方言文法研究会『全国方言文法辞典資料集（3）』「活用体系（2）」に掲載される広島県三次市方言（小西いずみ氏）の活用体系記述（以下、「三次市方言活用体系」と呼ぶ）と対照する。三次市方言は、尾道市と同じく備後方言に含まれるため、

今回の分析において、類似する特徴が多く見られた。

二　三成地区方言の形容動詞の活用

前稿で「談話内に見られる気づかれない方言」として紹介したものに、次のような「～なかった」の表現があった。

（1）a．そんなことをして遊ぶようなかったですナァ。（昔の話、第４回）

b．そして、女の人は、子供も大人も着物来（着）て、そりゃァ、ほんま、祭りのようなかったナァ。あれはァ。（昔の話、第６回）

（2）そうでしょう。祭りでも、賑やかなかったですわナァ。そこ、そこの四辻路じゃなんじゃいうところに、みな、灯籠が立ってナァ。灯をつけてナァ。（昔の話、最終回）

この「ようだ」や「賑やかだ」のような形容動詞の活用にみられる「～なかった」について、「三次市方言活用体系」（一二四－一二五頁）では次のように記述される。

（3）〈断定過去形〉

形容名詞（※筆者注：「形容名詞（述語）」とは、本稿の「形容動詞」）には、「～ナ」にさらに「カッタ」を後接した形と、「ジャッタ」を後接した形がある。前者のほうが優勢である。名詞は「ジャッタ」を後接した形を使う。

・アノヘヤー｛シズカナカッタ／シズカジャッタ｝デ。（あの部屋は静かだったよ。）

・キョネンマデ ガクセージャッタヨ。アノコワ。（去年まで学生だったよ。あの子は。）

（3）の三次市方言においても、形容動詞の活用に、「～

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か（だ）	学生［ガクセー］（だ）
終止類	断定非過去	アカェー	シズカ（ジャ） シズカナ	ガクセー（ジャ）
	断定過去	アカカッタ	シズカジャッタ シズカナカッタ	ガクセージャッタ
	推量	アカカロー アカェージャロー	シズカジャロー シズカナカロー シズカナロー	ガクセージャロー

なかった」が確認される。また「三次市方言活用体系」では、形容詞・名詞述語とまとめて、これらは先の表のように整理される（表は一部抜粋）。

三成地区の形容詞・形容動詞・名詞述語を、「三次市方言活用体系」の断定過去と対照させると、形容動詞の断定過去については、（4）に示すように「～なかった」だけでなく、「～じゃった」も同一話者の発言に確認できる。また、（5）（6）に示すように、形容詞については「～かった」、名詞述語については「～じゃった」が確認される。

（4）ほんとたいへんじゃったですよ。（昔の話、第3回）

（5）a．私ら小さい頃は、家の中で遊ぶいうことはなかったんですよ。（昔の話、第1回）

b．それが、また、匂いがナア、あれで頭が痛うなる。あれほど辛いなァ、なかったヨ。（昔の話、第3回）

（6）a．あの西郷隆盛さんの歌じゃったと思うです。（昔の話、第3回）

b．じゃけん、どういうか、静かな結婚式じゃったあネ。（昔の話、第5回）

なお、これを受けて、あらためて方言談話資料を検討すると、次の（7）に見られる「そうなかったんじゃけんどね」について、「そう（（多く）は）なかったのだけどね」という意味ではなく、「そんなふうだったんだけどね」という意味であった可能性が考えられる。

（7）上ばっかし麦が、底はお米、そして上に麦を置いて米を隠して、おむすびの中へ梅を入れる。それも、先生がぐるっと廻って、それで「ヨシ」と云われたら弁当食べるん。まあァなんか、そうなかったんじゃけんどね。（昔の話、第3回）

ここで示した形容動詞の活用にみられる「～なかった」については、方言談話資料の他に、（8）のような例が見られ、現在でも高年層には用いられていることが確認できている。

（8）（筆者から夏に近くの神社に蛍を見に行った

話を聞いて）そりゃ、きれいなかったでしょう。
（それは、きれいだったでしょう。）

三　三成地区方言の尊敬形

本節では、三成地区方言の尊敬形について考察する。方言談話資料で確認できた尊敬形は、「テ」形および「テ」形からなる「～ちゃった」の形である。「三次市方言活用体系」では、三次市方言の尊敬形について、次のように記述される。

（9）（略）おおよそ名詞述語に準じた活用をするが、過去形などやや不規則性がある。
断定非過去　ミテ（ジャ）
断定過去・連体過去　ミチャッタ
推量　ミテジャロー
連体非過去　ミテノ、ミテン
中止　ミチャッテ
仮定　ミテナラ、ミテンナラ
否定　ミテジャナェー、ミテンナェー
とりたて否定　ミチャーナェー
丁寧　ミテデス
継続　ミョーッテ（ジャ）、ミトッテ（ジャ）
のだ　ミテン（ジャ）

・センセーワ　アサノ　ニュースー　ミテジャ。
（先生は朝のニュースをご覧になる。）
・ハヨー　オキニャー　ヤマダサンガ　キテデ。
（早く起きないと山田さんが来られるよ。）
・ヤマダサンワ　キノー　イエー　オッチャッタェー。（山田さんは昨日家におられたよ。）
・フリソーナケン　モッテ　イッチャッタホーガエーデスデー。（降りそうだから（雨具を）持っていらっしゃったほうがいいですよ。）［向江田］
・アナタガ〔オッテノ／オッテン〕トキニキマスケー。（あなたがおられる時に来ますから。）
・ヤマダサンワ　イマ　イエデ　ネトッテンジャ。
（山田さんは今家で寝ていらっしゃるのだ。）

「三次市方言活用体系」では、この他、「カキンサル」「ミンサル」などの「ンサル」形についても記述があるが、三成地区の方言談話資料では「さる」の形式は確認できていない。

三・一　三成地区方言の尊敬形の活用

まず「テ」形について、三成地区の方言談話資料内でどのような活用がみられるかを、（9）に沿って整理する。なお、中止、仮定、とりたて否定については談話資料内に対応例が確認できないため、（10）からは除いている。

（10）

断定非過去　ミテ（ジャ）　○
断定過去・連体過去　ミチャッタ　○
推量　ミテジャロー　…ミテデショー　○
連体非過去　ミテノ、ミテン　○
否定　ミテジャナェー、ミテンナェー
　　…ミテンナイ　○
丁寧　ミテデス　○
継続　ミョーッテ（ジャ）、ミトッテ（ジャ）
　　…ミョーチャッタ、ミトッテ　○
のだ　ミテン（ジャ）　…ミテンデス　○

（10）の形式にあたる例を（11）に挙げる。

（11）a．もう、家じゃアなしに、外でしてじゃけんナア。（昔の話、第5回）
b．そしたら、「いや、昔は、あの名前何やら云うたんやがのォ。へいで大門に変わったんでぇ」云うちゃったけなァ。（昔の話、最終回）
c．昔の人は泊って帰ってでしょう、ナァ。（昔の話、第6回）
d．そうしたら、自分の身を守るために練習させてん訳よ。（昔の話、第1回）
e．姑さんが、どうも云うてんないけんなァ。（昔の話、第6回）
f．覚えとってですか。（昔の話、第3回）
g．中学校の生徒が先生の家へ刈に来てくりょうちやった。（昔の話、第5回）
h．それにお餅をもって、親戚へ配るわけ、そしたら向うに祭りの時は、また、持ってきてくれてんです。（昔の話、第6回）

三・二　三成地区方言の尊敬形「チャッタ」の使用状況

前節で活用について整理したところ、「三成の昔

の話を聞く」の方言談話資料内で、「チャッタ」の使用に偏りがあることが見えてきた。以下、「チャッタ」が用いられる全例を示す。

（12）a．海軍さんが「僕らは海の仕事をするのに、こんなところでしょうて、戦争は勝つはずがない」といって笑わしょうちゃった。（昔の話、第1回）

b．今は、ありヤまア、何時しちゃったん、ようなでしょう。（昔の話、第5回）

c．あの人の墓を掃除に行ったり。いっぺん、あのウ、歌を作っとる偉い人だいうて、ようちゃったでしょう。（昔の話、第5回）

d．尾道までおじいさんが、いつも買い物カゴをネェ。オオクで担いで買いに行きょうちゃったです。（昔の話、第6回）

e．30以上持って行きょうちゃった思いますョ。（昔の話、第6回）

f．そうなのを飾りようちゃったけどナア。（昔の話、第7回）

g．あぁなのを、おばあさんら、しょっちゅうやったがナア（略）あゝいうことをしょうちやったわナア。（昔の話、第7回）

h．あの頭に付ける油とか、あのクリームとか、かんざしとか、あゝなのを、あれは、山方の人だったと思う男の人が、背負って売りに来ようちゃったナ。（昔の話、第7回）

i．そして戦後には魚をカンカンに入れて売りに来ようちゃった。（昔の話、第7回）

j．まァ、この上「こまるこ」いう殿さんがおっちゃったようなでしょう。（昔の話、最終回）

k．そしたら、「いや、昔は、あの名前何やら云うたんやがのォ。へいで大門に変わったんでぇ」云うちゃったけなァ。（昔の話、最終回）

（12）では、11例中8例が継続である。二節で見たように「～じゃった」の形式は談話資料内でも確認できる。そのため、たとえば「来ようてじゃった」のような形式も可能性としては考えられるが、ここでは確認できない。

一方の「ミトッテ」のような継続の形は、（13）に全例を示したように、そのほとんどがこの談話相手に向けての発話である。

（13）a．そうなん知っとってんないですゥ？（昔の話、第1回）
b．覚えとってですか。（昔の話、第3回）
c．貴方ら知っとってんなかろうなァ。（昔の話、第3回）
d．盆には、私ら戦死しとってんところの墓を掃除したり、勲五等とかいう大きな墓があったでしょう。（昔の話、第5回）
e．「やあとうの日」というのを知っとって。（昔の話、第7回）
f．昔の人は本当いうてんかナァ。（昔の話、第7回）
g．ほいじゃけん、そうように入った人がおってんか、どうかしらんけどナァ。（昔の話、第8回）
h．「そうじゃそうない」いうて想像しようてんかどうか、知らんけど。（昔の話、第7回）
i．そして、こないだ、大門さんが来られて、「おたくァ、昔から大門さんいう苗字じゃったん」云うて聞いたんですよ。その大きな門があったけ、大門としとってかと思うて。（昔の話、最終回）

この談話の発話相手に対してのものでない例でも、（13 i）は、引用内で「大門さん」に向けてのものとみなすことができ、（13 d）（13 h）は、連体修飾である。

「ちゃった」は現在の三成地区の方言では、藤本（二〇二〇）で示したように、「あなたは、今、何と　ユーテクレチャッタ」のような文を得ることができており、必ずしも過去の継続に使用を限らない。また、談話資料は一人の話者の使用実態のため、「ちゃった」の見せる偏りが話者個人のものかどうか、まだ把握しきれないところがある。ただし、現在、若年層にはあまり用いられていないと見られる「ちゃった」の変遷の過程を考える上で、過去の継続は考察の観点に置いておくことができそうである。

四　まとめ

本稿では、「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌に掲載された「三成の昔の話を聞く」の資料に見られた形容動詞および尊敬形について、「三次市方言活用記述」と対照させて活用を記述し、考察を行った。これらは前稿からの課題であった。

また、前々稿、前稿と合わせて、地域に残る談話資料の記録を用いて方言分析を行える可能性について検討してきた。今回用いた談話資料は、地域住民の手によって作成されたものである。これらの資料からは、方言が地域のアイデンティティを支える資源の一つであるという特性が見えてきていた。今回、それらに加え、方言談話としてまとまった量のものが地域に残されている場合、それらを分析対象として方言文法を考察することが可能であることが確認できた。

引用資料

三成地区の歴史と自然を訪ねる会『三訪会会報』創刊号～三四号
三成地区の歴史と自然を訪ねる会『三訪会会報』五九号～八〇号
方言文法研究会『全国方言文法辞典資料集（３）』「活用体系（２）広島県三次市方言」（小西いずみ氏）http://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2017/3-13.pdf 参照

参考文献

灰谷謙二（二〇一六）『これが広島弁じゃ！』、洋泉社
藤本真理子（二〇二〇）「敬語は距離？―尾道の方言「ちゃった」を考える―」『談話会会報』一〇、尾道市立大学芸術文化学部日本文学科、九三―九九頁
藤本真理子（二〇二一）「地域のことばはどのようにして残るか―『三訪会会報』を資料のひとつに―」『談話会会報』一一、尾道市立大学芸術文化学部日本文学科、一九―二六頁
藤本真理子（二〇二二）「地域の会報にあらわれる方言談話―『三訪会会報』広島県尾道市三成地区を中心に―」『談話会会報』一二、尾道市立大学芸術文化学部日本文学科、一―一六頁

本研究は、JSPS 科研費 JP20K00633 の助成を受けたものです。

―ふじもと・まりこ　日本文学科准教授―